

氏名(本籍)	<small>なか にし りょうたろう</small> 中西 僚太郎 (兵庫県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第1,249号
学位授与年月日	平成9年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	近代日本農村の歴史地理学的研究
主査	筑波大学教授 理学博士 石井英也
副査	筑波大学教授 文学博士 大濱徹也
副査	筑波大学助教授 文学博士 小口千明
副査	筑波大学教授 理学博士 斎藤功

論文の内容の要旨

序論、結論を含めて6章からなる本論文は、長野県佐久盆地と茨城県鬼怒川流域を中心に、明治末期から昭和初期の農村における農家の経営と生活の全体像を個別具体的に考察することを目的としたものである。本論文の特色は、農民の日記を用いて近代日本農村の具体像を克明に復原することで、農業経営のあり方を、農業技術・労働力構造・日常生活と関連づけて総体として観察し、時代的背景と地域性をふまえて検討したことにある。

第1章「序論」は、近代日本農村に関する従来の研究では他主制や村落構造の特質の解明が中心課題とされ、農業経営や生活に関する具体相の検討が等閑視されてきた現況を問い、固有の地域性をふまえたそれらの分析から農村の実態を再考することが、今日の農村研究との関わりという点でも、農村史の再編成のうえでも急務の課題であることを説いている。

第2章「近代日本農業の地域的展開」は、近代日本農業の地域的展開と構造を検証し、土地利用・土地生産性・土地所有・経営規模と経営類型・雇用労働力と畜力利用のあり方から、研究対象地域である佐久盆地と鬼怒川流域を位置づけている。

第3章「土地所有と経営の構造」は、南佐久郡旧桜井村の臼田家ならびに結城郡旧西豊田村の中島家の日記を素材に、両地域における土地所有と農業経営のあり方(生産性・品種・投下肥料・輪作体系)を比較検討したものである。桜井村では経営規模が零細で、生産性の高い稲作を中心に養蚕、水田養鯉や畜産(養鶏・養豚)を組み合わせた稲作複合経営が発達したのに対し、西豊田村では経営規模が大きく、かつ普通畑作物の栽培が支配的な農業経営が昭和初期まで続かなかで、養蚕・ビール瓶俵生産などの副業化が進展していることを明らかにしている。両地域で作物の栽培品種や輪作体系の態様などは異なるとはいえ、明治末期から昭和初期にかけて養蚕業の導入を中心として、日本農業の特質である、高度に土地集約的な小農的複合経営化が進展し、相対的に土地利用型農業の比重が小さくなったことを指摘している。

第4章「農業技術・労働と労働力の構造」は、稲作や養蚕業などの部門別に技術と労働の実態を分析し、この時期の農作業の技術変化が、労働生産性の向上をもたらしたものでなく、経営と労働のあり方はより密接な関係をもつようになった実態を明らかにしている。桜井村では経営規模が零細であったため、家族労働力に依存する割合が大きかったのに対し、西豊田村が経営規模の大きさに対応して、常時1～2名の雇用者を抱えていること、中継相続などで家族労働力を確保することなどを検証している。また、両事例農家で家族規模の周期とそれに対

応する経営規模の変化がみられることや、大正末期から昭和初期には、都市部での労働市場の拡大が農村での労働慣行に影響を及ぼし、手伝い労働の減少と日雇い労働の増加が共通してみられたことを指摘している。

第5章「日常生活の構造と変容」では、桜井村と西豊田村における年間の生活リズムを臼田家と中島家の日記で分析し、稲作と養蚕労働の季節的リズムを基盤とする生活慣行があることを確認したものである。農業経営の変化や副業化の進展によって祭日の移動がみられるが、桜井村が春と秋の農閑期に祭りを配置し、基本的に水田地域型の生活リズムを形成していること、西豊田村が夏の祇園祭を軸に、畑作型の生活リズムを築いていることを析出している。また、複合経営化の進展で労働強化がみられることは両地域で共通しているが、家族労作経営による桜井村が、慣行休日を明確に位置づけていないのに対して、雇用労働者を抱える西豊田村では慣行休日が明確に設定され、新暦への移行も遅れた違いがあったことを指摘している。

第6章「結論」は、地域の置かれた自然条件や関係位置を基盤として、生業のあり方や経営規模の相違が醸成され、それは労働力の編成から家族のあり方を規定し、生活リズムが出来あがる構造を説きおよぶ。とくにその作用構造のなかで、経営規模の差異が家族のあり方や生活リズムを規定する重要な要因になっていることを指摘し、このことは現代日本における農村の労働慣行や生活にまで影響を及ぼしており、農業経営や農村の地域的差異を理解する指標となりうることを主張している。また、両地域で経営複合化の進展、生活リズムの変化、勤労の強化、農業労働の賃労働化などが共通してみられ、この時期が大きな変革期であったことを強調して統括している。

審査の結果の要旨

本論文は、日記を読み解くことで経営と生活を丹念に復原し、その構造的関連、地域的・時代的意味を論じた作品であるが、とりわけ地理学では、地域構造や地域性を論じる際に統計でえられる平均像から議論することが多く、また生活に関する研究蓄積も少なく、日記を用いた手法や生活を含む農村の全体像を解明しようとした点で、意欲的な研究と認められる。農業経営・農業技術・労働力構造・日常生活に関する徹底した記述は、明治後期から昭和初期に至る農業経営や農村生活の特色を析出しており、江戸時代以来の日本農業の特質と考えられてきた小農的複合経営の具体像を提示し、明治後期から昭和初期にその特質形成が大きく進んだ実態を明らかにした研究として大きな意味をもつ。また、この時期は一般に地主制の強化や農民の困窮化によって特徴づけられてきたが、土地利用型農業からの脱皮は土地所有という束縛から人々を解放する可能性を提供した側面もあり、再評価が必要であること、あるいは現代的意味での都市・農村の関係はこの時期に大きく前進した実態を指摘しえたことも重要な問題提起である。村や地方レベルの資料を精力的に収集し、日記という個人情報地域に位置づけることに成功したばかりでなく、関東甲信地方の農村の特性を日本全体の地域構造を踏まえて読むことで、その位置づけを明確にしえた点も地理学の成果として高く評価できる。

しかし、本論文には、いくつかの課題も残されている。この時期に農村の経営や生活に大きな影響を及ぼした農政の言及に乏しいことや、地域比較の尺度としての経営規模の意味や本格的畜産を欠く日本農業の複合経営の特色などに関する議論が不十分なため、地域の具体像を日本農業の全体像に位置づける点で、説得的な議論に欠けるうらみが残ることである。これらの諸点の解消には、より多くの調査・研究経験が必要なものだけに、本論のような緻密な事例調査の蓄積が望まれる。以上のような問題点があるとはいえ、本論文は近代日本の農業・農村生活を地域的把握から問い直し、丹念な実証研究で、大地に生きる農民像に関する新知見を提示した意欲的作品であり、学界に大いに寄与する成果と評価できる。

よって著者は、博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。